

# 共に育つ保育者と子ども

## — A先生とK子の一年間 —

清原 規子

春休みが過ぎ、新学期が始まった。

二週間程会っていないだけに、どの子も大きく成長しているように感じる。新しい学年になることへの期待にもよるのだろうか、とふと考える。

年長になったK子はどんな様子だろうか。新しいクラスにもうなじめているだろうか。少しばかり気になって部屋をのぞきに行くと、同じクラスの女の子たちがま

ごとをしているところに、どつぶり入るわけでもなく、かといって外から眺めているわけでもなく、何となく彼女たちの横にいる。私を見るとそれぞれに「今、おかあさんごっこをしているんだよ」と口にし、K子も自分から「私はお姉さんなの」と教えてくれる。

年少の春から幼稚園に入園したK子は、その年の終わり頃から自分を出せるようになり、年中になるとさら

に、自分の思いを不器用ではあるけれど様々な行動で表現するようになってきた。そんなK子の年中の一年間を、K子とK子に関わってきた保育者の様子から振り返ってみたいと思う。

人一倍愛情欲求の強いK子は四月、担任となったA先生にいつも抱きつきに行っていたが、五月の中頃からほんのささいな事柄で癩癩を起こし、部屋を飛び出したり、ものを投げたり壊したりすることが度々あった。部屋を飛び出して、行くところは大抵職員室で、そこには園長やバスの運転手そしてフリーの保育者が私を含めいつも三人程いた。K子は職員室に来ると、それぞれの先生と話をしたり、私たちのやっていることを見て手伝ってくれたり、職員室の机を借りて自分の活動をゆつくりと始めることが多かった。私たちもクラスで何があつたか分からないから余計に、できる限り彼女に応え、心落ち着いた時を過ごせるよう心がけていた。そのような日々が二学期の始め頃まで続き、そして次第になくなっ

ていった。部屋でのK子の具体的な変化を知る上でも、少しA先生の記録メモを見てみたい。

食べ物の形が気に入らないと癩癩を起こす。

(五月三十日)

「はさみを持って帰りたい」等言い張り、機嫌が悪くなる。

(六月二日)

機嫌を悪くして(自分で作った)時計を破ってしまった。

(六月十日)

ハーモニカの持ち方を指摘されると、ハーモニカを投げる。

(七月八日)

乱暴さはないが、「やだ」と何に対してもわがままである。

(九月四日)

(運動会の)練習中、ずっと職員室にいる。給食の時間にどうにか戻る。

(九月八日)

部屋にいる時間は短かったが、自然と練習に参加するようになってきた。

(九月十日)

かけっこの練習に初めて参加する。一番になってす

ごく嬉しそうだった。

(九月十一日)

少しでも(友達の)輪からはずれるとすぐに機嫌が悪くなる。

(九月十二日)

随分部屋にいるようになった。

(九月十七日)

クラスから抜け出すこともなくなり、随分落ち着いてきた。

(十月一日)

(聖話のため、年中少は二階に上がるのだが)二階に上がるのを嫌がっていた。しかし、少しして笑いながら一人でやって来た。

(十月四日)

朝の会の途中、すねて部屋の外に出たが、何も言わず見ていると自然に中に入った。(十月十八日)

※( )内文章は筆者補足

記録メモにあるように、ただ癩癩を起こしていた状態から、自分自身で自分をコントロールできるようになっていった。もちろんその日の状態できたりできなかつたりだが、



九月末頃からはほとんど職員室に長居をすることもなくなり、朝等に顔を出し、それぞれの先生に挨拶をする程度となっていた。

その間、A先生もかなりいろいろと思いを巡らせていて、自分自身を責めてみたり、周りの先生に相談してみたりしていた。K子への接し方も、はっきり注意してみたり、そのまま受け入れてみたり、少し離れて様子を見てみたりと試していたし、朝起きた時の調子が悪かったのだからかと考え、お家での様子を保護者の方に聞いてみたりもしていた。二十五人程の子どもたちを抱え、その中で一人をじっくり見るということは簡単なことではないと思う。特に担任という責任感で重圧もかかっている。

たのだろうが、K子をどんなふうを受け止め、理解していったらよいか思いあぐねていたことと思う。そんなA先生に対し、次のような助言もあつたようである。—K子は何か不安定なところがあるのでしよう。満足するまでしばらく様子を見てはいかがでしょうか。必ずクラスにとけこめるようになります。そして、九月頃からのA先生の記録メモには自分自身の思いも記されるようになっていいる。

時間をかけてゆっくり関わっていききたい。

(九月四日)

スキンシップをよくとっていききたい。(九月十日)

よかつたり悪かつたりの繰り返しだが、本人のやりたいうようにやらせていこうと思う。(十月九日)

恐らく、初めの頃は自分自身のことを書く余裕がなかったのであろう。A先生自身も時間と共に大きく変化していったように思う。

そして十二月—

最近とても落ち着いてきた。ものを投げたり、製作物を破ることもなくなった。今まで思うようにさせてきたのですっきりしたのではないだろうか。顔立ちも優しくなり、友達に対しても思いやりが持てるようになった。乱暴な言葉も言わなくなって良かったと思う。(十二月一日)

このあとも、たまにすねることがあつてもすぐ立ち直る様になった。また癩癩という他人に向けられたものはなく、落ち込むという自分自身で受けとめる表現も出る様になり、そんな時は周りから励まされて元気になったりと確実に自分自身をつかんでいつているように思う。

今こうやって一年間の流れを見直してみると、年中の初め、自分の欲求や要求をようやく表現できるように

なつたばかりのK子は、他者からの提案を受け入れる余裕などなく、それを癩癩という形で拒否していたのではないだろうか。それが精一杯の自己主張だったのである。あるいは、自分自身をすっかりみつめてほしいというシグナルでもあったのかもしれない。きっとK子も必死だったのだろう。

そんなK子と接していく中でA先生自身も随分と変化したことと思う。待つということ、子どもの育ちを見守るといふこと、子どもを信頼するということ、様々なことを考え、学んでいったのではないかと思う。そしてK子・A先生と関わってきた他の全職員にも、幼稚園の子どもたちを皆で育てていこうという思いがあったからこそ、その一人一人の力が力動的に働き、A先生も肩力が入ることなく、ゆったりとK子を見ることができるようになっていったのだと思う。

担任を持つている先生の他に、前述したようにフリーの保育者が何人かいる。子どもたちは自分自身の何らか

の精神的課題を抱え、それを解決していくのに自分から場所を選んでいく。時に、その場所は私たちフリーの保育者であつたりするが、子どもたちは私たちが必要な時やつてきて、必要でなくなつた時、クラスに戻つていく。一瞬寂しい気持ちもするが、自ら戻つていく時のしつかりした足取り、あるいは、弾んで楽しそうに行く様子にまた一つ成長したのね、と嬉しさが心に広がる瞬間でもある。

K子とA先生がこの一年間お互いに育ちあつていく姿を見て嬉しく思う。私もその中で大なり小なり成長できていけばよいのだが……。

(清星幼稚園)